

会員のば

育児休暇を取得した救急医の話

札幌市医師会
イムス札幌消化器中央総合病院

野崎 浩司

平成26年4月より、イムス札幌消化器中央総合病院（JR琴似駅の近くです）で麻酔と救急教育を担当しております野崎浩司です。平成7年（1995年）に旭川医大を卒業し麻酔科蘇生科に入局しましたが、その後は北海道と沖縄で、救急医療、集中治療、プレホスピタルケア（ドクターヘリ、ドクターカー）、研修医教育などを仕事の中心として参りました。しかし、今年から久しぶりに麻酔科を専従として「患者さんもスタッフも外科医も、安心・安全な手術室」の運営にかかわっております。

そんな私ですが、沖縄で救命救急センター副センター長を担当している時に、勤務先では男性医師として初めて、1カ月の育児休暇を取得しましたので、その時の話を書かせていただきます。

親戚のいない沖縄に移住し5年目（医師17年目）に、妻に11年ぶりの妊娠が発覚しました。待ちに待った第二子を授かり、嬉しい反面、「さて、出産はどうしよう…」という困難な問題も同時に生じました。長女はすでに小学5年生であり、里帰り出産も難しいため、いろいろ考えた末に出た答えが「そうか、自分が育児休暇を取ればいいのか！」ということでした。福井大学の救急医・林寛之教授が育児休暇を取得したことを知っていたため、立場の違いも考えず（？）に浮かんだアイデアでした。

すぐに職場の育児休暇に関する規定を隅から隅まで読み、さらに担当事務にも確認しましたが、「医師（夫）の取得は認めない」なんて言葉はもちろんありません。ある飲み会の場で、理事長に恐る恐るお話してみると、酔っていたおかげかもしれませんが「1年は無理だけど、1～2ヵ月なら良いよ～」との有難いお言葉を頂きました。その後、救命センター長にも了承していただき、後輩たちからは「先生のような立場の方が取得してくださると僕らも取りやすくなります！」という嬉しい言葉をもらえました（実際、後輩も数名、育休を取得しました）。

子どもの誕生から1カ月の間は、自分なりに育児

や家事にかかわり、改めて妻の偉大さを実感できましたし、子どもとも長い時間触れ合うことで、「この子たちと妻のためにも、また仕事をがんばろう」という気持ちが改めて強くなった次第です。その時の次女が2歳になった今も、育児休暇前よりは家事や育児にかかわっているつもりです（妻の評価は聞いていませんが…（苦笑））。

今後は育児休暇だけではなく、同僚がご家族の介護や自身の体調不良時等には仕事を気にせずゆっくり休めるよう、お互いにカバーできる職場作りができれば…と強く思っております。

最後に、当院の宣伝を少々。当院はルカ病院から琴似ロイヤル病院を経て、昨年、「イムス札幌消化器中央総合病院」に名称が変更となりました。現在、丹野誠志院長を中心に消化器を中心とした急性期病院への転換を図っているところです。自分も微力ではありますが、丹野院長の目指す「札幌でナンバーワンの病院（※診療面だけでなく、患者対応なども含めて）」に一日も早く到達できるようにお手伝いしております。今後は、地域の先生方からの手術適応患者さんのご紹介に外科医と協力の上、今以上にスムーズに対応できるような手術室運営を心がけて参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



次女の七五三写真撮影にて

はじめまして

旭川医科大学医師会
旭川医科大学 法医学講座

矢島 大介

はじめまして。平成26年4月から旭川医科大学法医学講座に赴任いたしました矢島大介と申します。私は東京都出身ですが、卒業は日本の南の端、沖縄県の琉球大学です。卒後は千葉大学で学位を取得し、そのまま法医学教室の教員として10年ほど勤務いたしました。今回、縁あって旭川医科大学に赴任することとなりました。

北海道の生活は初めてであり、しかも道内でもより寒さの厳しい旭川、冬の日常生活をどのようにしていくのか不安ではありますが、今のところは北海道の方の大きさと新しいものを受け入れやすい気質に助けられてなんとか生活しております。

私の勤務する旭川医科大学法医学講座は日本の法医学機関としては最北に位置する機関ではありますが、CT装置をはじめ、高性能薬物分析装置、遺伝子配列解析装置を講座独自で保有している先進的な法医学機関の一つです。犯罪の多様化や高齢者の独居死亡、危険ドラッグのまん延など法医学が扱う環境は大きく変化してきており、そのような変化に対応すべく、日々発展のための努力を行っております。

不幸にも亡くなられてしまった方の死亡の原因を調べ、死因を決定することがわれわれの仕事ですが、これは国民が同じ犯罪で亡くならないように、同じ事故で亡くならないように、同じ疾患で亡くならないように、死亡した方の情報を皆さんの安全・安心な生活および健康の維持に役立てていくことを目的としています。現時点ではこの仕組みがうまく回っているとは言い難い状況です。そしてこのシステムをうまく回すためには、法律的側面を含め多くの難しい課題があります。制度の変更には慎重な議論が必要で、ある程度の時間をかける必要がありますが、その間にも解剖の必要なお遺体は日々運び込まれます。制度がうまくないからと言って死因究明を止めるわけにはいきません。どのお遺体も、解剖検査の際にはわれわれに安心・安全に生きるための何等かの情報を与えてくれるという点で大切なものです。その情報をできる限り多く収集して記録・保存するために、真摯な姿勢で死因究明に取り組んでおります。

医師会の先生方には、お忙しい診療の中、解剖にならない数多くのお遺体について、検案という形で法医学業務の一翼を担っていただいておりますが、今後とも正確な死因診断のためにご協力をお願いいたします。

「歴史のまち」から

檜山医師会
北海道江差保健所

原田 智史

北海道医師会から大きな封筒が届き、封を開けてみると道医報への執筆依頼。いつも大先輩が投稿されているところに私のような若輩者が執筆してよいものか、と戸惑っているうちに締切りは刻一刻と迫り、これも何かの縁と一念発起し原稿を書くことにしました。

私は平成8年に札幌医大を卒業し、現在19年目になります。当地には平成24年に赴任し、2年強が経過しました。

当地は道南の名のとおり、北海道の中では温暖であり、道内有数の歴史ある神社とされている姥神(うばがみ)大神宮をはじめ、江戸時代以前からの繁栄を伝える建築物、江差追分をはじめ代々伝わる民謡など伝統文化にも事欠かず、自然豊かで積雪も少なく、これまで道内各地を回ってきましたが、とても住みやすい地域と思っています。

道内最古の祭であり、毎年8月に行われる姥神大神宮渡御祭では、各町内で代々保存している豪華絢爛な13台の山車(やま)が3日間にわたって町内を練り歩き、最終日の夜には山車が1ヵ所に集結し、道内外からの多くの観光客が見守る中、最高潮を迎えます。

日本一歴史のある民謡全国大会であり、毎年9月に行われる江差追分全国大会には、全国各地、さらにはブラジル等海外からも、各地での予選会を勝ち抜いた腕(のど?)に覚えのある歌手が集結し、チャンピオンの座を目指して激しい戦いが繰り広げられます。

江差を含む檜山に対しては札幌からは遠いというイメージをお持ちの方もいらっしゃると思いますが、本州には極めて近く、江差からは木古内経由で3時間もあれば青森に入ることができます。来年度北海道新幹線が開通すれば、さらなる時間の短縮が見込まれるところです。

当地にはまだまだ紹介しきれない魅力がたくさんあります。道南、東北地方へお越しの際には、ぜひとも当地へ足を伸ばしていただくと幸いです。

夕暮れの「赤とんぼ」

札幌市医師会
札幌清田病院

後藤 義朗

今夏は全国的に異常気象が多発した。中国、四国、九州で前線の発達で局所豪雨、そして広島では土砂災害に見舞われた。御嶽山は突然噴火して多くの犠牲者が出た。一方、札幌では厳しい真夏日が続いた。お盆後に雨が数日続いて北海道らしい気候に戻ったが、9/11には豪雨で札幌市内にも土砂災害避難勧告が発令された。

そんな夏の終わり。あっ、赤とんぼだ。今年は群れの数が多い。気温がまだ高いが異常気象を察知して慌てたのだろうか。空中をすいすい進むもの、車のボンネットに集まるものもいる。竿の先よりは、光を多く反射する車に魅かれているように見える。

思わず「赤とんぼ」を口ずさむ。山田耕筰作曲、三木露風作詞の童謡だ。

『夕焼け小焼けの赤とんぼ おわれてみたのはいつの日か』

夕焼けの空、赤とんぼの色の鮮やかさ、そして背中の温かなぬくもりを感じて、心が満たされてくる。

ところで、この童謡には有名な「論争」がある。まずは、赤とんぼのモデルだ。体が赤いのはアカネ属だが、日本に21種類、北海道では10種類（苫小牧民報の勇払原野の情報）いるとされ、アキアカネがその代表である。一方、ウスバキトンボは西日本に多く、体が赤くなるがアカネ属ではない。竿に止まるのはアカネ属だけだ（稲垣栄洋著『赤とんぼはなぜ竿の先にとまるのか？ 童謡・唱歌を科学する』東京堂出版 2011）。竿に止まるのは太陽の光で体を温めて飛行しやすくするためだ。また、夕焼けの時刻に飛び回る赤とんぼが見られる情景と合致する場所は北の方と推測されていた。はたして三木露風は大正10年函館のトラピスト教会近くで作ったとエッセイに記した（枝 重夫：“赤とんぼ”に秘められた話 College Today2(13) : 3. 1987）。従って、童謡のモデルはアカネ属のとんぼと考えられ、北海道とも縁が深い。

次に、赤とんぼの「アカ」の音程だ。歌ってみるとアクセントが不自然だ。音楽家・團伊玖磨の指摘は、「日本語のイントネーションやアクセントがそのままメロディに生かされている」のが山田耕筰の音楽的特徴だが、この部分が合致しないということ。ところが、明治以後、江戸弁では赤は「ア」にアクセントがあったので、歌の高低は正しいと判明した。一方、同じ旋律の歌詞二番「桑」、三番の「嫁」を歌ってみるとやはり合わない。「あか」の高低差は6度

（レハファ）と大きく、歌いにくい、とんぼがこちらこちらを飛び回るようにも聞こえる。

第三にメロディのパクリ説だ。吉行淳之介は、文芸春秋に「赤とんぼ騒動」というエッセイ（S56）で、シューマン作「ピアノと管弦楽のための序奏と協奏曲アレグロ ニ短調作品134」の一部に類似すると指摘。ネットで聴くと、これは確かに「赤とんぼ」だ。クラシックのピアノ曲が、急に日本的響きになりノスタルジーを誘う。また石原慎太郎はドイツの友人から古いドイツ民謡と聞いたとエッセイに書いたら、山田耕筰から抗議があったそうだ。ベルリン音楽大学留学時代にはクラシック音楽に影響を受けたのは間違いない。真相は不明だが、素人にはピアノ曲にあのメロディと歌が聞こえてくる。幸い、コピー問題にならず、謳い継がれるうちに日本人の心の歌に定着した。

第四に歌詞も誤解されやすい。「おわれて」とは、とんぼに追われるのではなく、作者が「負われて」いるのだが、その背は歌詞にあるように「姐や」の背であろう。それと、嫁に行った「15で」とあるのは、姐やなのか作者の年齢なのか？ どちらも正しい。だから、日本語は難しい。

ともあれ、赤とんぼを見て感傷に浸るのも歌のおかげだ。とんぼは田んぼの害虫を採るので、日本では益虫として親しまれるが、英語ではdragonflyと呼ばれ、良い印象はない。日本は鳴く虫も愛でる風習があるし、農耕生活が基盤であったから、虫ともかわり強い。

そこで、赤とんぼに助っ人をお願いしたい。東京都心の公園に生息するヒトスジシマカ対策だ。秋からデング熱を媒介している蚊だ。生息できる範囲は50~100m程度だが、「ヒッチハイ蚊一」もいて、車で移動して生息地を広げられる。公園の薬剤散布より、水たまりにいるボウフラを駆除してもらった方が環境に優しい。田んぼが減っているので、今後赤とんぼにも受難の時代が来よう。歌の世界を守り、とんぼたちの将来も約束される一方で、病気の蔓延も防げるのは両者の協力体制だ。ネットでもとんぼに期待する意見が飛び交う。蚊の天敵を導入する事例になろうが、外来種の昆虫ではなく、現存するとんぼの数を戻すだけだから、生態系のバランスへの影響は小さい。ただ、とんぼやヤゴがヒトスジシマカを優先的に補食するかどうは未確認だ。最近のNHK「クローズアップ現代」では、蚊の成虫駆除には幼虫対策が肝心で、横浜や西宮市を例に挙げ、道路脇や人家の水溜り（空容器、木のくぼみ等）を無くし、雨水マスには幼虫にのみ効果のある殺虫剤を使用したところ、成虫数の減量に成功したと報告した。ただ、効果発現まで数年かかる。今年の成虫駆除は難しいので冬が来るのを待つしかない。

とんぼは勝ち虫。つまり、真っ直ぐ前しか進まず、不退転の虫と侍が好んだシンボルだ。実際にはヘリ

コプターのように四枚の羽を駆使し空中でも静止でき、バックもできる優れた能力がある。その素早いとんぼだが、子どもがそっと近づいても逃げもせず、眼前でクルクル回す指に体が固まり、そして簡単に捕まえられるのも、何か哀れだ。逃れて子孫を残せたとしても、その運命は短い。

口ずさめば、夕焼けの野原に人ととんぼの姿が浮かぶ。その陰には命の儚さは同じと微笑むお地蔵様の優しい眼差しが感じられる。心なしか懐かしい日本の原風景だ。

蛇口が飛んだ日／寒かった旭川

深川医師会
深川市立病院

井関 憲一

最近では地球温暖化で、北海道でも酷寒というイメージが遠のきつつある。

30年以上前に、旭川で勤務していたことがある。その当時の旭川での出来事である。2月の寒い時期に出張で、数日家を空けて夜遅くに戻ってみると、集合住宅3階の1LDKの居間に、水道の蛇口が落ちていた。暖房を止めて出掛けていたので、寒さで水道が凍結して蛇口のネジが吹っ飛んだのだろうと、深く考えずに、蛇口を壁にある水道管との結合部にねじ込み、部屋の暖房を最強にして、眠りについた。いつもは水道の水が凍って出なくなっている、この方法で問題は容易に解決していた。しかし、その日は、夜中に水道管の破裂部位から水があふれ出し、部屋が水浸しになってしまった。夜中に大家さんをたたきおこして、元栓を閉じて、何とか後始末をした。厳冬期に何日も家を空けるときには本来すべき水抜きをしなかったという、軽率ミスが招いたアクシデントで、このような水道凍結事故は、寒冷地では起こりうることである。

事故は反省したものの、このアクシデントに対して、自分の中に腑に落ちない疑問が残り、それは数十年経った今もなお解決されてはいない。

水が凍ると体積が10%大きくなるので、水道凍結が水道管破裂につながるのには容易に理解できるし、蛇口が壁の水道管付着部から外れて真下に落ちてても不思議ではない。

疑問とは、(その瞬間を見ていた訳ではないが)蛇口が空中を飛んだことである。蛇口は、あの時、3～4メートルも離れた、居間と奥の部屋の境界に落ちていたのである。蛇口のねじは壊れていなかった。ねじ込み式の蛇口が、回転しながら数メートルも放物線を描きながら移動したと思われる。金属製の蛇口が飛ぶには、爆発時のような、一瞬の強烈

な内圧が必要なはずである。水道管が先に破裂した場合は、管軸方向の圧は減圧されるので、蛇口が飛ぶとは思えないし、蛇口が先に飛ぶと、水道管破裂は起きづらいと思われる。水道管の破裂と蛇口が飛ぶのが同時だったのだろうか。一瞬に水の凍結がおこり、通常考えられないほどの体積膨張圧が働いたのだろうか。寒冷地といえども、蛇口が飛んだなどということは、聞いたことがない。何らかの因子が偶然重なり合っただけのことだろうか。考えても分からない。ともかく、起きたことは事実なので、そういうこともあると納得するしかなかった。

歳月を経て、最近、気象庁のホームページで、過去の気象データが検索できることを知ったので、当時の旭川の寒さがいかほどであったかを調べてみた。部屋を空けたのは、1978年(昭和53年)2月某日からの5日間である。検索してみると、その5日間の旭川市の最低気温は、25.0、29.0、22.1、19.7、23.3℃(いずれもマイナス)である。旭川中心部がマイナス29.0℃の日の、旭川市郊外の江丹別はマイナス38.1℃とあり、強烈な寒波が旭川市を襲っていたようだ。その寒さであれば、水道凍結は当たり前だったと納得した。しかし、蛇口が飛んだことの説明にはつながらない。

さらに調べると、1978年2月の旭川市の最低気温がマイナス20℃以下になったのが、9日もあった。今と比べると、恐ろしいほどの酷寒の2月である。

最近では温暖化のせいで、旭川市でも、2月でマイナス20℃以下になる日数はせいぜい1日か2日で、0日のことも多くなっている。ともかく、今とは違い、はるかに寒かったという事実は確認できた。

その1978年には、渡辺真知子の「かもめが翔んだ日」がヒットしていた。スキー場のBGMで、よくこの歌が流れていたのを思い出す。

今でも、たまたまこの曲を耳にすると、サビの部分「かもめが翔んだー♪」というところが、「蛇口が飛んだー♪」というふうに記憶の糸が繋がりに、私の頭の中で、すっきりとは氷解できていない水道凍結事件がまた蘇ってくるのである。



ダムに沈む鉄道と 最短の鉄道トンネル

函館市医師会
函館渡辺病院

水関 清

群馬県北部を流れる利根川の支流である吾妻（あがつま）川流域に、ハッ場（やんば）ダムが建設中である。2009年の政権交代時にこのダムの建設中止が議論されたことは記憶に新しい。ダム工事に伴って一部区間が水没することになったのが、JR東日本の吾妻（あがつま）線である。

この線は、群馬県北部にある上越線の渋川駅から、吾妻川に沿うようにして西方の山間に分け入り、高原野菜の産地の嬭恋村にある大前駅との間を結ぶ総延長55.6kmの鉄道線である。実際に、吾妻線に乗ってみる。起点の渋川駅から普通列車で40分、左右の山が迫ってくると、眼下には国道145号線が並走し、その向こう側には吾妻川の流れが見える。岩島駅を過ぎて、新緑と紅葉の名所である吾妻渓谷が展開する左窓に注意していると、松やカエデが根を下ろした岩肌が谷にせり出したところをくり抜いた、「樽沢トンネル」に差し掛かる。

「日本一短い鉄道トンネル」だけあって、とにかく短い。入った途端に通り抜けてしまうほど短いトンネルである。トンネルの全長はわずか7.2m。電車1両の長さが20mなので、先頭がトンネルを抜けても、後方はまだトンネルに入っただけでさえない。鉄道に並走する道路からこの模様を眺めると、列車がトンネルの腹巻きをしたようになり、微笑ましい。トンネルの先にあるのが川原湯温泉駅で、その木造駅舎から約1.4kmにわたって続く遊歩道の渓谷美は素晴らしく、紅葉期の絶景はハイカーの間で親しまれてきた。その次の駅が、吾妻線建設当時の終着駅・長野原草津口駅である。

長い年月をかけて渓谷を刻み込んだ、吾妻川本流をせき止めて建設されているのがハッ場ダムである。ダム本体は、樽沢トンネルのある地点から川原湯温泉駅寄りの地に設けられるため、優れた渓谷美の中を列車が駆け抜けていた、川原湯温泉駅を挟む約6kmの区間は湖底に沈むことになった。現在、水没予定区間の前後の駅である岩島～長野原草津口間10.4kmにおいて、新線付け替えのための工事が行われている。吾妻線の新線は、水没予定区間を大きく南側に迂回して、吾妻川南岸の高台にトンネルと鉄橋を連ねるルートを取る。ダム完成後も樽沢トンネル自体は水没しないものの、新ルートにはこの区間は含まれず、その運用は2014年9月24日をもって終了し、首都圏に近いこの鉄道名所に鉄道ファンが駆けつけて、時ならぬ賑わいを見せたと報じられた。

付け替え区間は2014年10月1日に供用が開始され、吾妻線の総延長は0.3km短い55.3kmとなる。

ダムの建設による路線変更を沿線振興の起爆剤としたのが、大井川鉄道である。

大井川鉄道はJR東海道線の金谷駅から、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」との俗謡で知られる大井川に沿いながら、南アルプスの南麓に分け入って終点の井川駅を目指す、全線65kmの鉄道である。金谷と井川の間にある千頭（せんず）駅を境に、この鉄道は電化と非電化の区間に分かれる。金谷～千頭間39.5kmの本線は電化されているが、南海や京阪などの大手私鉄の中古電車が元の所属会社の塗装のままの姿でこの地方に多い茶畑の中を走る、動く「鉄道博物館」のような区間である。

千頭～井川間25.5kmの井川線は非電化で、もともとは大井川の電源開発などを目的に敷設され、沿線人口の少ない山奥の峡谷の小さな部落をつないでいた。大井川本流にダムが建設され、井川線の線路のおよそ4kmが水没することになったのは1990年のこと。これを機に井川線が廃止されるのでは、との観測をよそに、大井川鉄道は水没区間に迂回線を新設し、その一部をアプト式を用いたラック式鉄道とした。ラック式とは、2本のレールの間に歯型の付いた軌条を敷設し、機関車底面の車輪の間に追加された歯車と噛み合わせて、急勾配区間を上る方式のこと。信越線の横川～軽井沢間の碓氷峠越えのラックレール区間の廃止以来途絶えていたこの方式での鉄道が復活することとなり、現在では井川線のアプトいちしろ～長島ダム間が国内唯一の例である。

千頭～井川間には12の駅が設けられ、所要1時間47分である。これは、蛇行する大井川沿いのわずかな平地に敷かれた上り勾配の線路が急カーブの連続で、ここのみ電化されたアプト区間の前後で専用機関車の付け替えも必要、という構造上の要因によるものである。この所要時間では住民の足としての期待はわずかで、現在の乗客は観光客が大半のようである。こんな山奥でも道路整備は着実に進んでおり、ちなみに千頭～アプトいちしろ間9.9kmの所要時間を比べてみると、列車43分、自動車10分である。さらに、千頭から終点の一つ前にある閑蔵駅までの20.5kmではその差はさらに広がって、列車1時間29分、対路線バス30分であり、比較にもならない。

移動時間だけの観点から見ると不利な鉄道であるが、実際に井川線に乗ってみると、車窓はこれほどの時間差を補って余りある景観に満ちている。千頭を発車した列車は、並走する大井川の蛇行に沿って左右へのカーブを繰り返しながら徐々に高度を上げていく。狭い口径のトンネルを抜け、短い橋を渡り、戦前に建設された大井川ダム湖畔にある、アプトいちしろ駅に着く。乗客の大半が下車して、この駅でのアプト用機関車の付け替えの様子を見つめる。次の長島ダム駅までの1,487mは90パーミルの急勾配

区間。途中で渡る、大井川本流に立てられた1本だけの橋脚で支えられた橋も、同じ傾きの上り勾配で、まるで傾いたヤジロベエのようである。

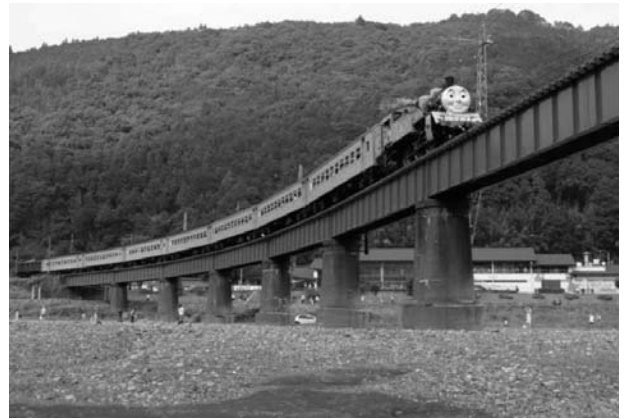
平田（ひらんだ）という難読駅を過ぎるとトンネルに入り、これを抜けると長島ダム湖である。接岨（せつそ）湖と名付けられたこの湖は、もとはと言えば蛇行する大井川なので、Ωの字のような形をしており、列車はこの湖を、まず右カーブしながら右岸から左岸方向に横切って、岬のように突き出た対岸の先端部に至り、奥大井湖上駅に停車する。駅には小公園が隣接し、ハイキングコースの起点となっている。列車は再び湖を左岸から右岸方向に渡るが、この鉄橋には歩道が併設されており、レインボーブリッジという愛称を持つ。この橋を渡り切った列車が入るトンネルの穿たれた山上にはあずまやがあり、「ユニークな形をした接岨湖」「中間部の湖上駅」「その左右に伸びる赤い鉄橋」「ゴトンゴトンとこれを渡る小さな電車」を見おろす景勝地となっている。

次に停車する接岨峡温泉駅はログハウス風木造駅舎で、構内には側線が伸び車庫も見えるが、現在は使われていない。次の尾盛（おもり）駅周辺には、民家はおろか公道もない。列車でしか行けない駅であることが好事家の興味を呼び、最近では「秘境駅」の一つに数えられている。秘境駅とは、山奥や原野など人里離れた地にあり、日常的な利用者も停車する列車本数も極めて少なく、アプローチそのものに困難を感じるほどの立地にある駅のことをいう。その意味では尾盛駅は、堂々たる秘境駅であろう。尾盛と次の閑蔵駅との間で列車は、川底からの高さ70.8mある関の沢橋梁を徐行しながら渡る。次の終点・井川は、大井川上流部にわが国初の中空重力ダムとして建設された井川ダムによって形成された井川湖畔の駅である。余談になるが、井川線末端の閑蔵・井川両駅は、意外なことに静岡市内の駅である。静岡市は、その行政区に駿河湾から南アルプスまでを含む広大な政令指定都市なのである。

大井川鉄道が辿った数奇な運命を踏まえた上で現在の姿を見ると、沿線人口減少という経営基盤の弱体化を、鉄道という存在自体を観光資源にすることで補おうという経営理念がうかがえる。すなわち、金谷～千頭間にSL急行を投入し、千頭～井川間にはラック式鉄道やレインボーブリッジなどの新たな鉄道資源を設けて優れた沿線景観と組み合わせることで、日常的旅客輸送という鉄道本来の実用性の減退を補おうとする努力が見てとれる。

最近、一歩進んだ観光鉄道としての側面が提示されたのが、保有するSL車両に対する徹底した鉄道キャラクターの意匠化である。幼児向けのTV番組で人気の「きかんしゃトーマス」号を実体模写したSL急行がそれである。くりくり目玉の丸顔をした青いSLトーマス号が、黄色い7両もの客車を曳いて大井

川にかかる鉄橋を実際に渡っていく姿を見ると、子どもたちだけではなく大人も歓声を挙げてしまう。TV画面での2次元画像と、キャラクターの模写とはいえ、旅客を乗せる実体としてのSL車両が眼前で躍動している3次元の姿とは、本質的な存在感が違うことを思い知らされる光景である。



樽沢トンネルに替わる、鉄道最短のトンネルについては諸説ある。瀬戸内海沿岸を走るJR西日本管内の呉線・安芸川尻～安登間の川尻トンネル（8.7m）をもってJR最短トンネルとする説が有力である。JR東日本管内では、日本海沿岸を走る五能線の陸奥岩崎～十二湖間にある仙北岩トンネル（9.5m）が最短と発表されている。

私鉄に範囲を広げると、長良川鉄道・相生～郡上八幡間の中野トンネル（7m）と大井川鉄道・地名～塩郷間の地名（じな）トンネル（7m）が肩を並べる。7mといえば、7.2mの樽沢トンネルよりも短く、もともとJRを含む鉄道の中で最短だったようである。ただ地名トンネルは、線路上を通る索道からの落下物保護の目的で建造された覆道で、真のトンネルではないとする説もある。

北海道でのJR最短トンネルは、函館線砂原支線の池田園～流山温泉間にある池田園トンネル（20m）である。緑に包まれた、煉瓦積みの潇洒な姿で、池田園駅から徒歩5分という好立地である。ここでは、下り列車がトンネル出口の形にくり抜かれた緑の空間の中を、ゆっくりと左カーブをしながら流山温泉方面に移動していくという、映画の一場面のような秀逸な光景に接することができる。



進駐軍がやってきた頃

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

近ごろ、イラク、シリア、ガザ、ウクライナなど世界各国における戦禍の惨状に接しながら、小学校四年生だった戦後の混乱期のことを思い出している。

子どもたちが「ルーズベルトのベルトが切れて、チャーチルちるちる首が散る首が散る」などと調子に乗って歌っていた、その「鬼畜米英」に、敗れるはずがないと教えられていた「神国日本」が敗れた。敗戦の現実を前にして、宮城に向かって土下座する国民の姿と一億総懺悔の新聞の見出しには、何か納得できないものを感じた。戦争指導者への反発の一方、長年の教育で植えつけられた米国への反感も消えなかった。

授業で神国日本を力説し、「天皇陛下、大元帥陛下」と口にするたびに、気をつけの姿勢を取っていた先生は辞めていかれたと聞いた。やはりという思いとともに、今はブローカーをしているとの噂には何やら裏切られた感じもした。疎開先の軽川国民学校から札幌の西創成国民学校に復学しての最初の作業は、教科書に墨を塗って軍国主義教育の痕跡を消し去ることであった。

種々の社会的規範、校則が存在の基盤を失い、将来の方向性が見えなかった当時の雰囲気鮮明に思い起こさせる出来事がある。全校生徒が朝礼前の屋内運動場でわいわい騒ぎ走り回っていた。どこからか歌声があがった。曲は戦時に流行った「若鷺の歌」(♪若い血潮の予科練の 七つボタンは桜に 今日も飛び飛び 霞ヶ浦にゃ でかい希望の 雲が湧く)であったと思う。この曲にのせて、当時駅頭などでよく目にしたガンガン部隊(生魚や乾物などをブリキ函(ガンガン)に詰め、列車で運び背負って地方へ行商して歩いた人々)のことを、「七つ八つの子どもを連れて今日も行く行くガンガン部隊ー」などと歌ったでたらめな歌詞の替え歌である。

次第に歌声の輪は広がり広がり、ついに広い運動場の全生徒がやけくそになって大合唱するに至る。「早く誰かが止めないといけない」「学校はこの状態を放置するのか」と思った。しばらくして、拡声器から「静かにしなさい、歌を止めなさい」と繰り返す教師の声が流れ、歌声は次第に収まっていった。ほっとする。ただ、その際教師が何と言って歌を制止させたか忘れたが、納得のいく内容ではなかった。子ども心にも、学校教育の体面が辛くも保たれたかと感じた事件である。

教育の指導方針に空白が生じ、授業の内容、授業

法にも試行錯誤が続いた。教師は戸惑い、急の会議等で多忙、自習時間も多く、授業途中で急用ができたからと、「ここに100円ある。どう使ったらよいか」の課題で討論するように、と言い残し教壇を後にされたこともある。

このころのことである。誰が持ち込んだものか、後ろの席から縦長の小紙片が数枚回ってきて、一枚ずつ取って前へ回せという。そこには、横書きで7行、「日本ーは富士サンデー」「月桂冠をうやマンデー」「火に水はチューズデー」「水田に苗をウエズデー」「木刀腰にサースデー」「金髪料理はフライデー」「お土産もらってごぶサタデー」とガリ版で印刷してあった。最初「これは判じ物か?」と思う。何回か目を通し「お土産」が読めなかった以外個々の文章の意味がほぼ分かってみると、すべてが「…デー」で終わっていることから、これは日本語の月～日の曜日を表す英語と関係があるらしいと推察できた。いまだ米軍進駐前で、これが戦時中敵性言語として見聞することのなかった英語との最初の出会いであった。

終戦後ややあつて(記録によると10月5日である)米軍が札幌市内に進駐してきた時のことはよく覚えている。中央区(南1条西6丁目)に住んでいたところで、新聞紙上にどこを何時ごろ通過する予定、と時間とルートが掲載されていた。無用な混乱を避けるため上からのお達しがあったようで、その時間帯には通りにならないようにと言われていた。しかしアメリカ人を一目見たいと、近くを通る時間に合わせて家を抜け出す。家々は戸締りをして人っ子一人見かけない異様な静けさである。緊張し見とがめられないよう通りの端を伝え歩いて、半町先の西6丁目東角近くまで来て物陰に隠れて待ち構える。

やがて道路の反対五丁目側を大通り方面から軍靴の音が近づいて来る。隊列を組んで歩調正しく来るのかと思いきや、鉄かぶとに各自銃を肩に下げた6～7人幅の列が、がやがやとしゃべりながら、いくつかの集団に分かれ通り過ぎる。数百人は居たろうか。目に付いたのは並べて背が高く大きいこと、黒人が多いことである。黒人も多くの黒褐色の者に混じって、初めて見る青みを帯びた黒い肌色の者がいるのに驚いた。ガムを噛み話しながら歩く、顔の黒と対照的な真っ白な歯が印象的だった。

札幌市内の主だった建物はほとんどが米軍に明け渡された。当初のころは建物に掲げられた星条旗と玄関に警備に立つ兵士の姿から一見してそれと分かった。自宅に比較的近く私のぶらぶら歩きの範囲内でも、拓銀本店、グランドホテル、札幌通信局ビルなどが接収されている。初冬の晴れ上がった日、北1条通りを歩いていると、暖房の効いた通信局の総ガラス張りのビルの中、ガラス越しの陽光を浴びながら、上半身裸の白人が仲間と談笑しながらタオルで体をごしごし擦っているのが見えた。「いい気なものだ」。冷たい外気と暖かいビルの中、日本と米国の

置かれた状況を端的に示しているように思えた。

戦争末期から敗戦直後のこの期間、食料不足はその極に達し、いつもすきっ腹を抱えていた。教室の入口そばの机の中に置かれた弁当が、昼食時に開けてみると、中身が空っぽになっていることもしばしばである。担任教官がクラスの全員に目を瞑らせ、「参考にするので、先生の言うことに黙って手を上げて答えなさい」と言って、「昨日夕ご飯を食べた者」「今朝ごはんを食べた者」「今日弁当を持ってきた者」と順次手を上げさせて、欠食児童の調査をしたこともある。乳児のいる家庭にたまたま配給される甘い缶入り練乳（コンデンスミルク）は、乳の出る母親の家庭では年長児や大人たちの何よりのご馳走で、私もその恩恵に浴した一人である。

こんな状況であったから、戦後に何度か一般家庭に配給になった直径15センチもの大きな缶入りのパインの缶詰には、飛び切りの甘さのものをこんなに大量に食べられるなんて、と大変ありがたく幸せな気持ちになった。同じような缶に入ったピーナツバターが配給されたこともあり、初めて味わう濃厚で腹応えのある食べ物に舌鼓を打った。「戦争が終わってよかった」とつくづく思った。

米軍の札幌への進駐前後のころだったと思う。教育政策の混乱の中、どういう経緯か不思議に思うが、全校生徒の護国神社参拝（戦時中、靖国神社の下部組織として学校ではよく同神社の参拝を行った）が行われた。神社への道筋の検討が不十分だったらしく、生徒の列は皮肉にも当時のススキノ歓楽街の一部をかすめて通る結果となった。夜は一見華やかでも、早朝は薄汚れゴミの散らかる歓楽街を、生徒はクラスごとに列をなして進んでいく。しどけない下着姿の女性が家から走り出て道路を横切ったり、起きがけで髪ぼうぼうの女性が生徒の行列に驚いて急ぎ戸口に引っ込んだりする姿を見掛ける。生徒は見て見ぬ振りで黙って歩いていたが、教師陣はさぞかし慌てたことだろう。

米軍の進駐後、街には街娼（世間では夜の女などと呼んだ）の姿が目につき、一般米兵相手の「パンパン」、特定の米兵相手の「オンリー」といった言葉も一般化していた。東京から転校してきたばかりの1君と、大通公園の西6～7丁目通りを歩いていた時のことである。くっきりとルージュを引いた女性とすれ違いざま1君が呟いた。「パンパン」。これを聞きとがめた件の女性、キツとなって振り向き、「ナニッ！ もう一度言ってごらん！」。しかし、その剣幕にいささかも怯むことなく、間髪を入れずに1君の口から出た言葉、「いや、お姉さんたちのお蔭で、日本の女性たちが守られているんです」には、あっけに取られた。女性は何やら捨て台詞を残して去っていった。どこでこんな知識を得たのだろう、こましゃくれた口ぶり、大人顔負けの対応、さすが東京人だと感じ入った。

昭和22年に入り、住まいが南2条の魚町（1丁目西角から2軒目）へと移る。通りを隔てた自家の向かい側には、果物屋、食堂、乾物商が並んでいて、通りの両側の店舗の前には野菜などを売る露店が出ていた。時折、当時の日本の車の2倍以上もある大きなオープンカー（キャデラックとかいった）が、車道から露天のすき間目掛けて「グイーン」と突っ込んできて、果物屋の店先に「キーツ」と止まり、米国人夫婦が降り立つのを見掛けた。真駒内には既に立派な米軍キャンプがありPXもあったはずだが、将校クラスの家族がそこでは足りない果物を買いにきた様子で、米国の生活をそのままに優雅な暮らしぶりが見えた。

しかし、下級兵士の日常はこれとは違っていただろしい。昭和23～24年ごろ、魚町の職住兼用の住まいはしばしば米兵のストレス発散の標的となった。店は閉店後、ガラス戸を閉め、さらにトタン板を張った頑丈な戸板で隙間無く覆う二重の戸締りをする。兵士の門限時間を過ぎた夜の10時過ぎ、魚町の西角の店舗のあたりから何か戸板を叩くようなドンドンという音が聞こえてきて、それは次第にわが家に近づいてくる。家の者は「障らぬ神に祟りなし」とばかりにかかわりを避けていたが、私は戸板のすぐ内側まで一、二度様子を見に行っていたことがある。

泥酔した米兵が何やら喚きながら力いっぱい戸板を蹴飛ばしている。厚底の軍靴で戸板をドスンと蹴飛ばす音は、近くにいると大変恐ろしく、今にも戸板が蹴破られそうだ。意味は分からないが、息遣いも荒く喚いている言葉は「ガッテム」「デム・ユー」と聞こえる場合が多く、時に「サノバ・ビッチ」というものもある。その場の様子から、意味は「こん畜生」とかそのようなものだろうと推測したが、これらの英語は「goddamn」「Damn you」「a son of a bitch」のことだと後になって分かった。狼藉は15～20分位で納まることが多かったが、30分を超えても止まず警察に連絡し、MP（米軍警官）と日本人警官が駆け付けたこともある。昭和25年の朝鮮戦争が始まる前で、日本での駐留も長期化し下級兵士の心も荒んでいたのであろう。

以来ほぼ70年の年月が流れた。この間、私の米国に対する‘しこり’は、中学以来興味を持ち始めた英語を通して、特に高校時代に教会等で開かれた無料の英語教室に参加し、牧師などアメリカ人講師の率直さに触れたことなどにより徐々に薄らいでいった。しかしその完全な解消には、医学研究の道に入り専門領域の米国人研究者と親交を重ねるまでの長い時間を要した。戦争遂行者、軍国主義教育への憤り、反感などの被害者意識も成人に伴い増大していったが、四カ月のフィリピン国滞在時の体験、種々の戦記本の読書などを通して、日本人としての他のアジア諸国民への加害者意識も芽生えてきた。

ともかく「もう戦争は真っ平である」。

富永先生 副甲状腺摘出術3,000例を達成 ～ギネスブック登録にまつわる小騒動～

札幌市医師会
札幌北クリニック

大平 整爾

PTx3,000例 2013年9月下旬、名古屋で副甲状腺摘出術（parathyroidectomy:PTx）研究会が開催された。大会長・富永芳博先生（名古屋第二赤十字病院）の講演で、富永グループのPTx総数が3,000例を超えたという報告に接した。その詳細は「二次性副甲状腺機能亢進症に対する副甲状腺摘出術3,000例の経験」と題されて、日本透析医会雑誌2014年4月号（2014;1:92-97）にご自身が報告されている。全国のあちこちへ出向いて、手術が行われている。さて、この研究会はPTxに関心を持つ医師が集まっているわけであり、これが発表された瞬間、会場は一瞬静まり返り、数秒後に賞賛で沸き返ったのだった。

日本透析医学会の統計資料によれば、透析期間20～30年の患者でPTxを必要とする症例は10%、30年以上では30%と報告されている。すべての血液透析患者が血管アクセスの複数回の作製と修復処置を必須とする状況とは、大いに異なるわけである。かねてから富永氏が腎不全患者に続発する副甲状腺機能亢進症（2HPT）に対して精力的にPTxを行い、その上で術後経過はむろん、摘出標本について詳細な病理学的な分析や遺伝子解析を行ってきたことはよく承知していた。卓越した外科的な手技・優れた術後成績に止まらず、2HPT発症の病態生理への深い考察に、この病態や手術に携わる医師の多くが敬意を表してきていた。富永グループの実績は広く国際的にも認知されており、私ども同好の士の誇りであり、喜びでもある。

VA5,000例 外科医ならずとも、医師なら誰でも、自らが行った医学的な処置数を数えるものであろう。血液透析患者に必須の血管アクセス（VA）については、手術する件数はPTxに較べて格段に多く、私も奇しくも3,000例まで数えて、何かの小論に述べたことがある。その後、院長職に就いてからはVAの手術も減ったし、記録を小まめに取り習慣を失ってしまった。VA領域の名手なら私も友人に大勢を知っているが、正確な記録を残しているVA外科医の一人は間違いなく新潟・信楽園病院の酒井信治先生であろう。彼は1972年以降、2010年5月まででVA関連手術を5,000例こなし、友人たちが祝賀会を催したというから本物で、その後もVA手術を続け、2014年7月には5,718例に達したと聞き及ぶ。手術には気力と体力とが求められ、酒井氏も大した逸材である。

副甲状腺の発見 1850年、ロンドンの動物園でインドサイが死亡した。貴重な動物であったためであ

ろう、比較解剖学者のリチャード・オーエンが死因解明のために解剖を行ったという記録が残っている（図1）。この時にオーエンはサイの頸部にこれまで見たことのない豆粒大の組織を発見して記載しているが、後にOwen's gland（オーエンの腺）と称され、今でいう副甲状腺であったという次第である。オーエンはこれを「a small compact yellow glandular body attached to the thyroid」と記述しており、彼が観察した組織は今も標本としてイギリスの外科学会が保存しているという。ひとの副甲状腺は、1887年スウェーデン・ウプサラ大学の医学生サンドストロームが犬・兎・猫・馬などの頸部で甲状腺の裏面に存在する小組織を発見し、ひとの解剖でも確認したのであった。サンドストロームはこれをglandulae parathyroideae（パラサイロイド）と名付けた。paraは「傍」（かたわら）の意味であり、一時「上皮小体」とも言われたが、現在では「副甲状腺parathyroid（glands）」と呼称されることが一般的である。このウプサラ大学へ、富永氏は1989年に留学されており、本場で副甲状腺学を学ばれたことになる。1個の腺が30～50mg、4個あったとして合計120～150mgにしか及ばない小重量の組織が、ホルモン（PTH）を分泌して腎や骨に働き、生体のカルシウム・リン・活性型ビタミンDなどに大きな影響を及ぼす。こうした精巧で複雑な機序はまことに不可思議きわまりなく、生体の妙をここに見る思いである。

副甲状腺摘出術（PTx） 腎性2HPTに対するPTxは1960年Lancet誌に発表されたスタンベリー・ニコルソンらによる手術を嚆矢とする。彼等は腎不全で重度腎性骨栄養症（ROD）の患者にPTxを施行し、著明な骨・関節症状の改善を報告したのであった。PTxという手術の始まりが1960年であれば、ごく最近のことであったと知る。透析療法が本格化して以

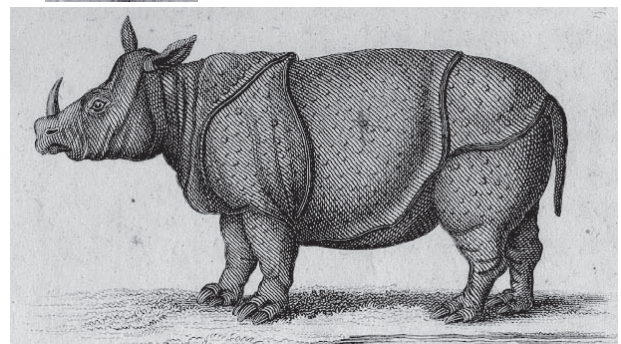


図1 インドサイ（Indian Rhinoceros）
1850年ロンドン動物園 Richard Owen 頸部に豆粒大の臓器を発見。cf. Sandstrom 1887（ヒト）

降、重症腎不全患者の長期生存が可能となり、PTxが必要となる患者は漸増したと言える。2008年1月からカルシウム擬似様薬・シナカルセト塩酸塩が登場し、PTxは著減していく。しかし、PTxの必要性は依然として大きいものと認識されている。

ギネス世界記録への登録 富永グループがPTx3,000例を達成されたとの朗報を知った私たちは、既述のように喜び驚くばかりであったが、熊本・松下会あけぼのクリニックの田中元子先生が「ギネスへの登録を」という意外だが楽しみのある呼びかけをなされた。彼女は腎不全患者のCaP,PTH代謝異常やそれらに随伴する骨・関節・血管などの病変に多大な興味を抱いて、この領域でいい仕事を続けてきた才色兼備の腎臓内科医である。PTx研究会懇親会の場での彼女の提案は、出席者の多くがいささか酪酊していたというわけではなく、諸手を挙げて多数の賛同を得た。年の功で私はこの話の発起人に推されたが、秋澤忠男先生・深川雅史先生・平方秀樹先生が加わってくださり、言い出しっぺの田中先生は事務局ということに相成った。富永先生にそれとなく確かめると、PTx3,000例の記録はしっかりとPCに保存されていると申されるから、申請受諾は大丈夫そうである。申請料や登録料に加えて、ギネスの鑑定員(?)がイギリスから来日して調査するとなると結構費用がかさむのではないかという意見も出て、発起人から全国の同好の士に「善意の寄付」をお願いすることにした(後日、ギネスに日本事務所があり、公式認定員数名が駐在していて認定を依頼することが可能なことを知った)。事務局・元子先生の行動は、すこぶる素早い。2013年10月の中旬には寄付依頼状が全国を駆けめぐり、この慶事に賛成してくれる人が多く、あっという間に目標額が集まったというメールが田中先生から届いた。まずは、第一関門が通過できたわけである。時を置かずに、田中先生からギネス日本事務所に「PTx3,000例達成」の申請がなされた。ギネスへの記録申請は全世界で年間数万件に及ぶと聞いていたので、時間が掛かるなと次第にこの申請を忘れてしまっていた2013年12月の中旬、田中先生からメールがあった。私どもの申請は受理されなかったという残念な結果で、彼女宛のギネス日本事務所からの書状内容は以下の通りであった(一部略)。

田中 元子様

ギネスワールドレコーズよりご連絡いたします。

この度は、ギネス世界記録へのご申請をありがとうございます。

ご申請内容:「二次性副甲状腺機能亢進症に対する副甲状腺摘出術施行症例数」

ギネス世界記録では年に5万件以上のお問合せおよび申請を頂いており、本ケースのように新しいカテゴリーの場合は、まず弊社の理念と照らし合わせたいうえで、あらゆる角度から審議され、新たなカテ

ゴリーとして設定可能かどうか判断させていただきますことをご報告いたします。『ギネス世界記録』に該当するかは、まず以下の4点の基準に照らし合わせて検討されます。

1) 計測可能か。2) 証明可能か。3) 標準化可能か。(計測は唯一点においてのみ、そして他の人も同じ計測方法を取ることが可能か、世界基準であるか、世界的に普遍性があるかなど)。4) 記録更新が可能か。

残念ながら、審議した結果、今回頂きました申請は、弊社の記録対象の基準を満たないと判断されました。また、弊社では、現在は、手術の数に関する記録は取り扱っておりません。

最後になりますが、これはギネス世界記録の視点に基づく判断であり、申請頂きました内容の価値がこの判断によって損なわれるわけではございません。

ギネスワールドレコーズジャパン 記録管理部一同
(2013年12月19日)

残念な結果であったが、至極丁寧に理に適った返答であり、納得せざるを得なかった。しかし、事はこれにて一件落着とはいかないのである。田中事務局長から、集金された寄付金をどういたしましょうという問い合わせである。富永氏へ何か記念品をとという元子先生のアイデアは平方先生に伝えられ、彼のアイデアでガラス・オブジェの犀(サイ)を贈呈することにしたとのメールがあったのは、2014年の2月ごろであったか。まもなく見事なサイの像の写真が送られてきたが、図2にご覧になるごとくである。田中事務局長の最後のお仕事は残金の返済で、私はこれを2014年4月に受け取った。ちょっとした騒動が巻き起こったのだったが、一時楽しい夢を見せてもらったわけで、富永氏と田中氏に感謝したい気持ちである。二次性副甲状腺機能亢進症に対するPTxは日本の維持透析患者数が漸減する現状から、今後一施設で3,000例を達成することは極めて困難であろうと思われる。富永グループの記録は長く破られることはなからう。減少してきたとは言え、PTxの必要性が皆無となったのではないことを最後に強調しておきたい。



図2 名古屋第二赤十字病院 富永 芳博 先生
PTx 3,000例 達成記念 (2013年)